

令和八年度

国語問題（L）

前期日程

〔注意〕

- 1 問題冊子および解答用冊子は、試験開始の合図があるまで開いてはいけません。
- 2 受験番号は、解答用紙の受験番号欄（計八か所）に正確に記入すること。
- 3 問題冊子のページ数は、表紙をのぞき十六ページである。脱落している場合はただちに申し出ること。
- 4 解答用紙は四枚である。解答用紙をミシン目に従って切り離すこと。
- 5 解答は、解答用紙の指定されたところに記入すること。
- 6 問題冊子の余白は適宜下書きに使用してよい。
- 7 解答用紙は持ち帰ってはいけません。
- 8 問題冊子は持ち帰ること。

令和8年度 一般選抜前期日程 国語 (L)

問題訂正

・問題冊子

11ページ 問四 1行目

(誤)・・・「今夜最大にびくつき、文字通り飛びあがった」・・・

(正)・・・「今夜最大にびくつき、文字どおり飛びあがった」・・・

次の文章は、「日本の美意識」という概念の意義を問うものです。筆者は、これに先立つ部分で、一般に「日本の美意識」とされる「幽玄」や「さび」について、藤原俊成や芭蕉らの歌論や俳論に即して検討したうえで、「幽玄」や「さび」とは、俊成や芭蕉ら「個人に特有の美意識に帰属するものであり、その意味内実は……（中略）……それぞれにことなっている」ために、「特定の個人や社会や時代をこえた、とくべつに『日本的』といわれるような美意識を想定することはできない」と述べています。これを読んで後の問いに答えなさい。なお出題の都合上、一部本文を省略・改変したところがあります。

ひとが対象の美的質と呼ぶものは、じつさいには対象それ自体が客観的にもち、われわれが五感によつてはつきり知覚したり物理的に記述したりできる感覚的な特徴の一種ではなく、そうした特徴に対して、われわれがたんに感覚にとどまらない特定のやりかたで、つまりは「美的」なやりかたで反応することであられる、われわれの主観的な経験の実質である。それゆえ、そうした美的質を名指すべく批評に用いられる美的用語、伝統的な美学では美的概念とか美的カテゴリーとか呼ばれるものは、われわれ自身の美的反応の特定のタイプを指示するものである。もちろんそうした美的反応の基礎には、人間であるかぎりでの自然な、したがってある意味で普遍的な素質というものがあるにはちがいない。だがそれ以上に、なぜあるものが優（優美）とか幽玄とか艶とか「さび」といった美的概念で呼ばれるのかといえば、それは歴史上のある時点における特定の社会・文化がそうした美的反応を共有し、これをそのように名指したからだとしか答えようがない。ここには循環^①があるが、これは論理的な悪循環ではなく、歴史の事実としての解釈学的循環である。

わたしは、特定の社会・文化とその歴史が特定の美的質を規定する機制を「美的フレーミング」と呼ぶが、それは月や花、赤や青、ピアノや琴の音など、そうした対象についての非美的知覚を、自然の風景や油彩画やソナタや箏曲といった、それ自身歴史相対的な一定のコンセプトにもとづいた特定の条件枠のもとで、美的に組織立て構造化する社会的、文化的、慣習的なふるまいである。それはいわば対象のそれ自体は非美的な特徴^②についてのわれわれの感覚を、特定のコンセプトのもとで美的に造形するふるまいであり、それをわれわれはふつつ、ある個人に特有の「感性」とか、ある社会・文化に共有された「感

性」と呼ぶのである。もちろん特定の社会における美的フレイミングの枠内に現出する美的質に気づき、これを共有するためには、ひとはこのふるまいの流儀を学び、ジャンルや技法、時代や様式についてのある程度の知識にもとづいて、さまざまな非美的、感覚的特徴をあるしかたで選択し、これを美的に秩序立てることが必要である。こんにちでは、コンサートホールに響くせきばらいや衣擦きみずれの音はふつうノイズとして無視されなければならないが、一七・八世紀の貴族の宴では、そこで奏でられるターフェル・ムジークのみならず、きらびやかな衣装の衣擦はしれの音やさんざめく会話の声も、豪奢で華麗な饗宴に諧和する美的な楽音として聴かれたかもしれない。雪・月・花や鶯、時鳥、紅葉、秋の夕暮、枯野の薄すすき、有明の月等に対する様式化された美的享受が和歌の「本意」とされるのも、和歌というジャンルないしコンセプトのもとで形成され共有された美的フレイミングの所産である。それはたしかに「日本的」といつてまちがいはないが、正しいともいえない。それはより正確には、日本の平安朝・鎌倉初期の貴族社会、もつといえは貴族たちに共有された美的理念と価値判定基準とに支配された「集団による批評と鑑賞の場である歌合」という、和歌的な美的共同体を中心に形成された美意識というべきで、それ以上に日本の歴史をつらぬいて、したがって時代や地域や階層をこえて、日本人や日本文化に共通普遍の意識特性などというものではない。それゆえ、明治以来世間に流布する「日本的なるもの」や「日本の美意識」という概念は、正確には上述のような意味になった命題の省略形であり、そのかぎりでのみ「日本的」というような表現にもなんらかの意味があるというべきである。

美意識が美的フレイミングの所産だとして、この相対化のもとでは、西洋人に、あるいはドイツ人やフランス人に特有の美意識とか、日本人に独特の美意識といったいい方も正確ではない。たしかに、いわゆる「日本的」な美は、そのままでは西洋人には理解できないかもしれない。だがわれわれ日本人にとっての、いわゆる「西洋的」な美はどうだろう。われわれ日本人は明治以来現在にいたるまで、積極的に西洋文化・芸術を移入し、これを理解するべく努力してきた結果、現在ではある程度まで西洋人と美的感性を共有しているといつてよい。そのわけは、われわれが明治以来一五〇年かけて、西洋的なアートワールドとその美的フレイミングの一端を習得するべく努めてきたからである。おそらくは日本語というローカルな言語の壁にさえぎられて、西洋人が日本的な美的フレイミングを習得することは、現在においてもなお十分なままだが、かれらが西洋人

であるがゆえに、結局は幽玄や「さび」を完全に理解することはできないというのは根拠のない主張である。じつさい、「秋の日の ギョロン^ゴの ためいきの 身にしみて ひたぶるに うら悲し」と歌うヴェルレーヌにとつての「秋の夕暮」は、いかほどか俊成や定家の「秋の夕暮」につうじているかも知れないのである。ショパンのピアノ曲を理解し味わうためには、西洋一九世紀の音楽を理解し、ピアノという楽器を理解し、そのなかに美的に受けとめ、これをどのように味わうべきかを習得する必要があるが、明治まで音楽といえば琴や三味線や笛、また謡曲や浄瑠璃や端唄のようなものしか知らなかった日本人は、明治以後学校教育やメディア等をつうじて、西洋音楽の習得に努めてきたのである。その一方で日本の伝統的な音楽や、和歌・俳諧や能、そして幽玄や「さび」は、これを楽しむための美的フレーミングがもはや共有されなかったために、現代の多くの日本人にとってアクセスできないものとなっている。現在にのこっている花見や紅葉狩りといった風俗・習慣にしても、それはこれらが和歌に詠まれた時代の美的享受のありかたとは微妙にこととなっているだろう。

(中略)

従来の日本の美意識論が問題なのは、このような相対性を無視して、「西洋的」な美と区別されるべき「東洋的」で「日本的」な美が存在すると前提する点にある。……(中略)……そしてこの点では哲学者による日本の美意識論も、しばしば実情を無視した性急な一般化の弊をまぬがれない。

(中略)

ところで、哲学者による日本の美意識論が依拠した大西克礼^{よしのり}とはといえば、かれの『風雅論』^{*}が出版された昭和十五年当時の、「殊に最近のやうに精神史や思想史の方面に於いて、西洋的なものに対して、東洋的或は日本的なるものを強調する風潮の盛なる時代」にあつて、「わが国民の美意識や芸術思想の研究の方面に於いても」認められる、個々の現象を貫く「所謂日本的なるもの」の統一的原理を掴み出さうとする傾向」に対しては、意外なことに批判的なのである。かれはたとえば、あはれ・幽玄・さび等に共通の美的本質を想定し、これらを同一本質の三つの歴史的顕現であるとか、中世の幽玄の歴史的に発展したものが近世の俳諧などにおける「さび」の概念にほかならないと見たりする国文学者に対して、それは「精神史或は精神

哲学の立場から、日本人の美意識や芸術の現象を考察する時の観点」だが、その前に「先づ個々の問題、個々の現象のそれぞれの本質を、充分に究明する」ことが美学にとつては重要であると批判する。だがその一方で大西は、美学も結局は幽玄・あはれ・さびといった諸範疇^{はんちゆう}を統一的に考察する方向に進むのだが、その際美学はこれら諸概念の個々の美的本質を「美学的理論の統一的根拠から、体系的に分化させることによって、その各々の特殊性を理論的に基礎づける」のであり、それゆえ美学にとつて「日本的」と云ふ特色そのものは全く問題にならない。「日本的」とか「西洋的」とか云ふことは、それ自身歴史的問題にすぎないからである。「日本美学」などと云うことは、便宜上の仮りの言葉としては兎も角、理論的には意味をなさないと言はなければならない」という。だが大西のこの理論的・体系的普遍主義もまた、美的フレーミングの相対主義に立つわれわれにとつては受けいれがたいものである^④。

（西村清和『幽玄とさびの美学』による）

*ターフェル・ムジーク——食卓音楽の意。王侯貴族や富裕階級の食事、宴会に食卓のかたわらで演奏される一種の社交音楽。

*「秋の日の……」——フランスの詩人ポール・ヴェルレーヌ（一八四四—一八九六）「秋の歌」の上田敏（一八七四—一九一六）による訳。

*大西克礼（一八八八—一九五九）——大正・昭和期の美学者。

問一 傍線部①について、ここで言う「循環」とはどういうことか説明しなさい。

問二 傍線部②について、「非美的な特徴」とはどのような特徴か、本文で言う「美的質」との関係に留意して説明しなさい。

問三 傍線部③について、「根拠のない主張である」とされるのはなぜか、本文をふまえて説明しなさい。

問四 傍線部④について、なぜ「受け入れがたい」のか、「美的フレーミングの相対主義」の意味を明確にしたうえで説明しなさい。

II

次の文章は、川上未映子の小説『夏物語』の一部です。舞台は二〇〇八年の東京で、一人暮らしをしている夏子のもとに、大阪に住む姉の巻子が、娘の緑子を連れて滞在しています。これを読んで後の問いに答えなさい。なお出題の都合上、一部本文を省略・改変したところがあります。

七時頃には帰ってくると言い残してクリニックに行った巻子は、八時を過ぎても戻らず、九時になっても戻らなかった。携帯電話にも何度か電話をかけてみたけれど、呼びだし音がなるまゝに留守番電話サービスに転送されてしまう。電池が尽きたか、故意に電源を切っているのだ。「もしもし巻ちゃんお疲れさま。心配してるから、これ聞いたら折り返しお願いね」わたしはメッセージを吹きこんで通話ボタンを切った。

東京で三人で食べる最後の晩御飯——といってもたった二泊の滞在なのだから最後というのも大げさなのだけれど、とにかく何を食べようか、せっかくだから電車に乗ってどこかへかけてもいいし、何か食べてみたいものはあるかなど、巻子が帰ってきてから相談して決めようと思っていた。しかし肝心の巻子が帰ってこない。緑子を連れてスーパーに行つて食材を買い、何か簡単なものでも作って先に食べていようかとも考えたけれど、米もないし、こんな時間から料理するのは正直に言うところ億劫で、わたしはそもそも調理をするのがものすごく苦手なのだ。そうするうちに巻子が帰ってくるかもしれない。巻ちゃんが帰ってきたら昨夜とおなじとこやけど中華料理屋行つて、なんかほかのん食べようか、もう帰ってくるやろ、と言いながら、緑子に何かあげられる小説がないかどうか本棚を眺めたり、雑誌をばらばらとめくったり、緑子はノートに何かを書いたりしながら待っていたのだが、十分が過ぎ、二十分が過ぎ、一時間が過ぎても巻子は帰ってこなかった。

(中略)

十時になっても、巻子は帰ってこなかった。ここが東京でいくら慣れない街だとはいっても、まさか駅の名前を忘れるということはないだろうし、駅からこの部屋まではまっすぐ道なりに歩いてくるだけだから、こちらも迷いようがない。何か問題が発生したのであればわたしに電話をかけてくれればいいだけの話で、もし充電が切れたのであれば携帯用電池なんかどこに

も売っている。では電話を落としてしまったか、財布を落としてしまったか、あるいはわたしに連絡をしたくない理由が何かあるのか。またあるいは何か事件というかできごとで巻きこまれたりなんかして、前後不覚のじたいに陥っている可能性がある、あるのかどうか。

いろんな状況を想像してみても、しかしそのどれもが現実的でないような気がした。これだけ人があふれている東京で、何かあればどんなかたちであれどこからか連絡がくるはずだし、なんといっても巻子は四十歳になろうという大人というか人間なのだ。連絡がないということは、それはたんに、本人が連絡をしてこない、以上のことではない、と考えるのが筋である。そういうわけで、いくら巻子の帰りが遅くなっているもべつに大したことではない。しかし緑子はもちろんそうは思えないように、雨漏りを受けるコップが水位を増してゆくように、だんだん不安になっているのがわかる。黙っていても、内側から少しずつ硬くなり始めているのが伝わってくるのだった。

玄関のドアのむこうで階段を昇り降りする音が響いたり、少しでも気配がするとわたしたちはさっと顔をあげて反応し、しかしそれは巻子ではなくてやりすごす、ということが何度もあった。わたしはテレビの音量をぎりぎりまで下げ、開きっぱなしにしている携帯電話の画面を見、数分おきにメールの送受信ボタンを押して何も届いていないことを確認した。

「なあなあ緑子、さずがにお腹減ってるっていうかこれ限界ちゃう、パン食べよか」と誘ってみると、緑子は三角に折った膝に顎を乗せたまま、あいまいに首をふった。そしてそのすぐあとに——いきなりがばっと中腰になり、まるで重大な告白でもするような真剣なまなざしでわたしをじっと見つめた。それからまた思い直したようにもとの位置に座り、膝を抱えた。「その動き、びびるわ」わたしは真剣にびっくりしたのでそう言うと、緑子は軽く下唇を噛んで、小さく鼻で息をついた。

(中略)

テレビではびかびかした色調のスタジオで芸能人たちがクイズに答えており、誰かの発言がいちいち大きくテロップになって飛びだした。何を言っているのかほとんど聞きとれないほどに音量を小さくしているのにもかかわらず、テレビは驚くほど騒々しかった。緑子は眉間にちからを入れたまま、膝をまるめてじっと動かないでいる。

「緑子さん、いまきつと、頭んなかでいろんなことがぐるぐるしてるよね」とわたしは言ってみた。緑子は顔をあげてわたしを見た。

「しかし、あらゆる心配にはおよばんよ」わたしは目を細めた。^①「だいたいね、こういう場合ね、心配であれ何であれ、予想したことは裏切られるというジンクスがあるんだよね。予想したことは裏切られる、つていうわたしなりのジンクスがあるんですわ。これは今までのわたしの人生において、すべて、すべての中してるんやなこれが。予想したことつていうのは起らんのですよ。たとえば」

わたしは咳払いをひとつしてから話をつづけた。

「たとえば地震。地震というのもその代表的なひとつであって、地震が起きた、起きましたよね、でもその起きたときつていうのは誰ひとり、世界じゅうにこれだけおる人のなかで誰ひとりとしてその瞬間に地震のことを考えていなかったからこそ起きたのであって、その人々の予想のほんの一瞬间の隙間を狙って地震というものはやってくると、こういうわけよ」

緑子は難しい顔をして、わたしをじつと見ていた。

「たとえば今、地震きてませんよね。それは最低でもわたしらふたりで地震の話してるからつていう」わたしは言った。「もちろん地震がきたとき、誰も地震について考えていなかったなんていうことはこれ、証明することはできんよね。でも、証明できひんからこそ、みんながそれぞれさやかなジンクスをね、もってるつていうのがいんじゃないのかなつて」緑子はそれについてしばらくのあいだ考えているみたいだった。それからふと、ジンクスを日本語でなんていうのが気になった。立ち上がろうとすると^②緑子はびくつと体を震わせてまたもや中腰になり、わたしの टीーシャツ のすそをきゅつとひっぱった。

「なんよ、どこもいかんやんか、こつちがびびるがな」とわたしは笑い、机のひきだしから電子辞書をとって座り、電源を入れた。数年まえ、商店街のがらがら抽選機でみごと三等を当てたときの賞品で、画面が光る機能はないけれど、なかなか使いやすいくて重宝している。

「ジnkス」と入力してみると文字が表示され、「因縁のように思う事柄。本来は縁起の悪いことをいう」という説明書きが出た。わたしはつぎに「因縁」を入力した。すると今度は狭い画面がいつしゅん真つ暗に見えるくらいに長文がずらずらとひしめき、「事物を生じせしめる内的原因である因と外的原因である縁。事物、現象を生滅しょうめつさせる諸原因。また、そのように事物、現象が生滅すること。縁起」。目を凝らして読んで聞かせると、縁子は何度か肯きながら顎をひっこめた。そして難しい顔つきのまま電子辞書を手にとると、くんくんとボタンを押して文字を入力していった。画面を見つめ、ひとしきりそれを探りかえすと——急にはつとしたように顔をあげて、ぱちぱちと目を瞬またたかせた。自分が思いついたことを頭のなかで言葉に置き換えて、それで間違いがないかどうかをひとつひとつ確認しているみたいだった。そして自分の考えが辿りついたものに驚いたようにさらに大きく目をあけて、それからもう一度手にもった辞書をじつと見つめた。どうしたん、と訊いても、縁子はどこか興奮したような表情で首をふるだけで、何も答えなかった。わたしは電子辞書で適当な単語を調べていった。

「ほれ、『縁』と『縁』ってよう似てるな、漢字が。ほんならつぎは『縁』を調べてみようやないの。あー、なるほど。したらつぎは、隣の『怨恨』。見てこの、見るからに怨恨っていう感じの字面。やばいな。こわいな。怨恨とは恨み。なるほど。しかし『恨み』って書くよりも倍になる気がするな、パワーというかダメージが。例文読みます。『怨恨による殺人』ね。あるよね、ありがちよね。したらつぎは『殺人』。これもようある。毎日どこかで起こってる。っていうか、今この瞬間も、誰かがどこかで殺されてる……知ってた縁子、人が人を殺すときに、例えば包丁使うとするやん、そのときの包丁のむきっていうか、包丁の刃をうえにしてもってるか下にしてもってるかで、殺意のあるなし、あるいは強弱みたいなものの証明になるの。法律ではそれがかなりなポイントになるんやで。じつさい私の知りあいが——」と言いかけて、この話はさらにややこしく入り組んだうえにずいぶん長くなるのだったと思ひ直し、^③もつと陰惨な言葉を引いてみよう、なんかものすつこい恐ろしいのを、と縁子に提案した。

殺戮、業火、慄然、暗澹、気がつけばわたしたちは頭の鉢と鉢の骨がごりごりと当たるくらいに身を寄せて、電子辞書の小さな液晶画面に夢中になっていた。

「じゃあつぎは……でもさあ、わたしときどき考えるねんけど、今この瞬間にもほんまにさ、死んでるとか殺されてるところじゃなくて、たとえば拷問とかさ、まじで八つ裂きにされてる人とか、目玉をえぐり出されてる人とか、ほんまにものすごい目に遭ってる人がどっかにおるわけやんか、確実に。冗談とか想像じゃなくて、いまこの瞬間にもこの地球上のどこかでそんなものすごい苦痛が存在してるわけやろ。じゃあ、起きてない苦痛について考えることはできるやろか。たとえば、全身を焼かれてる人はおるやろ。ぜんぶの歯を抜かれてる人は？ たぶんおる。じゃあ、死ぬまでこそばされてる人はどう？ こそばしはなくても笑い毒きのことかやったらありえるか。薬物とか。いややな、笑いながら死ぬとか、いちばんいややな。悪夢やな。ほかにほ」

電子辞書に打ちこんだ文字のイメージから思いつくことをつらつらと話していると、緑子はやめてくれというように首を小刻みにふった。せやな、とわたしは返事し、ふたたび息をひそめて頭をくつつけて液晶画面に集中していると——まるでこのアパートにアパートとおなじくらいの何かが落ちてきたか衝突したかのようなものすごい音がして、わたしたちは今夜最大にびくつき、文字どおり飛びあがった。反射的にとりあつた手をつかんだままふりかえると、そこに巻子が立っていた。電気を消した暗い台所のむこう、ドアを開けっ放しにした玄関のたたきに巻子は立っており、廊下の蛍光灯の灰色の光がその輪郭をぼんやりと浮かびあがらせていた。

(川上未映子『夏物語』より)

*こそばされてる——「こそばす」は関西弁で「くすぐる」の意味。

問一 傍線部①について、夏子が「予想したことは裏切られるというジंकス」を二回繰り返して言っているのはなぜか、本文の内容をふまえて説明しなさい。

問二 傍線部②「緑子はびくつと体を震わせてまたもや中腰になり、わたしの टीーシャツのすそをきゅつとひっぱった」について、緑子がこのような動きをしたのはなぜか、本文の内容をふまえて説明しなさい。

問三 傍線部③「もつと陰惨な言葉を引いてみよう、なんかもものすっこい恐ろしいのを、と緑子に提案した」について、夏子がこのような提案をしたのはなぜか、本文の内容をふまえて説明しなさい。

問四 傍線部④について、夏子と緑子が「今夜最大にびくつき、文字通り飛びあがった」のには、二人が突然耳にした物音の大きさ以上の理由が考えられる。そのような理由について、本文全体の内容をふまえて説明しなさい。

III

次の文章は、和歌の指南について述べた手紙などを集めたものの一部です。これを読んで後の問いに答えなさい。

*
鳥丸資慶卿消息（うさねのきせき）には伝受（でんじゆ）の事、*
光広（みつひろ）などは、法皇御尋ねの時、「かつてこれ無き事」と申し上げたる由、法皇度々仰せられ候ふ。連歌などは、相伝（さうでん）有ること承り及び候ふ。てにをはに、色々の名ども御座候ふ。又は「大まはし、小まはし」など申すことも御座候ふ由、歌にはなき事と、拙者（せうしや）なども存ずる事に候ふ。てにをは紛（まぎ）らはし候ふ歌人の歌詠むと云ふことは先づ有るまじき事に候ふ。これにて合点（がてん）これあるべく候ふ。

「花に寄せて故人を思ふ」

ともにみし春はむかしの花かつらかけても人のしたはるるかな

このかなの事、これは少しならひに仕り候ふ事に候ふ。先づは、かやうのかなは、習ひを伝へず詠みたるは、或るいはあひ、或る時は違ひ候ふ事にて候ふ故、用捨（ようしや）仕る事に候ふ。それ故、当代公家中の歌には、このかな、これ無く候ふ。同題、

②
花咲かばむかしを忍ぶ袖の露かかれとてこそ人はうゑけん

「かかれとて人や植ゑけん」と候へば、てにをは合ひ申し候ふ。又こそを用ゐられ候へば、「かかれとてこそ人は植ゑけめ」と申せば合ひ申し候ふ。これにて分明（ぶみやう）に聞こえ申し候ふ。

*
飛鳥井雅章卿仰せに云はく。歌は第三句より案ずる物なりといへども、三句よりは詠みにくき物なり。下の句より案じて能く思ふなり。五文字、後に置くことも有るなり。西行の歌に「風になびく」の歌を、初めは「するがなる」と置かれしを、置きかねて定家（ていか）に問はれしに定家も「いかが侍らん」とて「慈円（じえん）に問はせ給へ」と侍りしに、西行やがて慈円の方（かた）へ行き「し
かじか」と申されければ、慈円も「いかが侍らん」とて云ひ出し給ふこともなく、西行も本意（ほんい）なく帰り出て、妻戸（つまど）に隠れ、立ち聞きせられたれば「風になびくふじの煙」と吟（ぎん）ぜられし故に、
③
西行も「風になびく」とせられ候ふ。惣（そう）じて五文字は取りかへ取りかへ、ひたと吟じ直すが能きなり。

又仰せ。歌は題に打ち向ひて、よの道具を出さずとも、有りのままに詠むべし。心より入りて、慥（たじ）かに詠み出し侍るべし。

たとへば、「ほのほのとあかしの浦」と吟じ、あなたこなたへ心移れば、^{*}「高砂^{たかさき}やこの浦船に帆をあげて」と吟じても歌に成るなり。心を第一に、有りのままに詠み出すが、今の秀逸^{しういつ}といふ物なり。^⑤とかく歌をば聞ゆる様に詠みたき物なり。大形^{おほかた}は、聞えにくき歌計^{ばか}りなり。

(萩原宗固『雲上歌訓』による)

* 烏丸資慶——江戸時代前期の公家・歌人。

* てには伝受——和歌で使われる言葉や文法などについての秘伝を伝えたもの。

* 光広——烏丸光弘。江戸時代前期の公家・歌人。

* 法皇——後水尾法皇。江戸時代前期の天皇。

* 大まはし、小まはし——和歌の仮名遣いや文法などに関する秘伝の一種。

* 飛鳥井雅章——江戸時代前期の公家・歌人。

* 「風になびく」の歌——「風になびく富士の煙の空にきえてゆくへも知らぬわが思ひかな」(『新古今和歌集』)

* 高砂やこの浦船に帆をあげて——謡曲「高砂」の一部。

問一 傍線部①「てにをは紛らはし候ふ歌人の歌詠むと云ふことは先づ有るまじき事に候ふ」を現代語訳しなさい。

問二 傍線部②「花咲かばむかしを忍ぶ袖の露かかれとてこそ人はうゑけん」を、題をふまえて現代語訳しなさい。

問三 傍線部③「西行……せられ候ふ」で、西行は何故そのようにしたのか、西行の心情もふまえて具体的に説明しなさい。

問四 傍線部④に示された「ほのぼのとあかしの浦」は、柿本人麻呂「ほのぼのとあかしの浦の朝霧に島隠れ行く舟をしぞ思ふ」(『古今和歌集』)を指す。これをふまえ、傍線部④「たとへば……歌に成るなり」について、書き手はどのように考えているのか、説明しなさい。

問五 傍線部⑤「とかく歌をば聞ゆる様に詠みたき物なり」を踏まえ、ここで考えられている理想の歌とはどのようなものか、具体的に説明しなさい。

IV

次の文章は、春秋時代、大国の楚に使者として赴いた斉の宰相晏嬰の豪胆で機知に富んだ才覚について述べたものです。これを読んで後の問いに答えなさい。設問の都合上、返り点や送り仮名を省略した箇所があります。

晏嬰使^{ツカヒス}楚。晏嬰身短^{ナレバ}、楚人為^{ツクリテ}小門於大門之側^{カタハラニ}而延^{マねク}晏嬰。晏

嬰不^レ入^ラ、曰^ク「使^{①ヒシテ}至^ル犬^ノ国^ニ者從^ハ犬^ノ門^ニ入^ル。今臣使^ハ楚^ニ、不当從此門入^ル」。

賓者更^{カフレバ}道^ヲ、晏嬰從^リ大門^ニ入^{リテ}見^ミ楚王^ニ。

楚王問^{ヒテ}曰^ク「斉無^キ人耶^{ヤト}」。晏嬰對^{コたヘテ}曰^ク「斉之臨淄^{メリン}有^リ三百閭^ノ閭^③張^{レバ}」。

袂^{たもとヲ}成^シ帷^シ、揮^シ汗^シ成^シ雨^ヲ、何^{なん}為^{オレゾ}無^キ人^{ナリ}。王難^{ジテ}曰^ク「然^{④ラバ}則^チ何^{なん}為^{オレゾ}使^{シムル}汝^{カト}」。

晏嬰對^{ヘテ}曰^ク「斉命^ハ使^{ズルニ}各^{ヒラ}有^リ所^{ツカサドル}主^{ナル}。賢者使^{ヒシナルニ}賢王^ニ、不肖者使^{ナルハ}不肖王^ニ」。

⑤ 晏嬰最^ハ不肖^モ、故^{ナリ}宜^ニ使^{シク}楚^{ヒス}耳^{ニのみト}。

(『晏子春秋』内篇・雜下による)

* 債者——接待役。

* 臨淄——齊の都。

* 閭——居住区域。

* 帷——張り幕。

* 主——主管する。担当する。

問一 傍線部①「使至天國者從犬門入」は、どのようなことをいうのか、言外にこめた皮肉に着目しながら、わかりやすく説明しなさい。

問二 傍線部②「不当從此門入」を、すべて平仮名を用いて書き下し文に改めなさい。現代仮名遣いでもよい。

問三 傍線部③「張袂成帷、揮汗成雨」は、どのようなことをいうのか、比喩表現に着目しながら、わかりやすく説明しなさい。

問四 傍線部④「然則何為使汝」を、「然」の意味するところを明示しながら、現代語訳しなさい。

問五 傍線部⑤「嬰最不肖、故宜使楚耳」は、どのようなことをいうのか、言外にこめた皮肉に着目しながら、わかりやすく説明しなさい。